

戯作者たちの書物と薬の広告

専修大学向井信夫文庫所蔵の和本にみえる

和漢古典籍研究分科会

共立女子大学図書館 山岸 いづみ
専修大学図書館 七島 美和
大東文化大学図書館 鶴田 香織
中央大学図書館 植苗 翔
明治大学図書館 鈴木 秀子
立正大学情報メディアセンター 横山 侑子

1. はじめに

和漢古典籍研究分科会は、日本や中国・朝鮮半島などで刊行された古典籍資料について、大学図書館職員として必要な書誌学の基礎知識・書誌作成の方法を習得することを目的としている。また書物にみえる情報をくみ取り、考察、分析して、出版史や学術の淵源、書物の変転にまで調査の範囲を広げている。

2. 戯作者たちの書物と薬の広告

我々は、分科会活動を通して和本に触れる中で、滝沢馬琴や山東京伝といった戯作者の小説、いわゆる読本に、書籍の広告だけでなく、薬や雑貨、化粧品の広告が載っていることに気が付いた。そこで我々は、なぜ戯作者たちの書籍の中にそのような広告が掲載されているのか、そしてこれらの広告を、書誌作成、たとえば無刊記本の出版者や出版年の推定に役立てることはできないかという着眼点から、専修大学所蔵向井信夫文庫を対象として調査を試みた。

なお、専修大学所蔵向井信夫文庫とは、江戸期を代表する戯作者の作品を中心に集めた和本、図書、雑誌のコレクションである。その分野は、読

本、草双紙、滑稽本、人情本など多種にわたる。とりわけ庄巻なのは草双紙であり、特に文化4(1807)年以降の合巻は美しい錦絵擦り付け表紙と細かい彫りの物語部分から成り、巧緻を極めている。

さて、我々は上述の着眼点をもとに、以下の課題を設定して研究を行った。

1. 書籍目録から蔵版目録、そして薬や化粧品等の広告へという広告の変遷の背景を、出版、教育、流通といった視点から探る。
2. 専修大学所蔵向井信夫文庫に含まれる四人の戯作者の本に見られる、薬を中心とした広告を詳しく調査し、書誌作成に役立てる手掛かりを考察する。

まず、広告の変遷の背景について述べる前に、江戸時代において書籍の広告がどのように変化していったかを概観しておきたい。

江戸時代すべての期間を通じて書籍に広告が掲載されていたわけではない。幕府や寺院を中心に比較的少数の書籍が流通していた江戸時代初期には、広告はほとんど見られない。しかし、寛文年間(1661-1673)になると商業出版を網羅的に掲載した「書籍目録」という出版目録が刊行されるよ

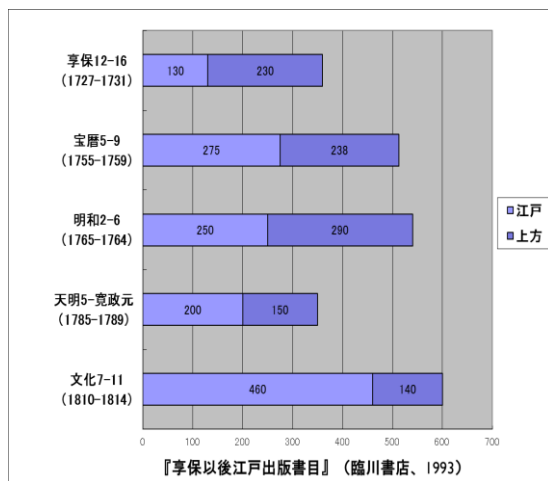
うになった。「書籍目録」は享和年間までの約150年間に20種ほどが刊行された。続いて享保年間(1716-1735)になると、それぞれの版元は、自らが出版した書籍の蔵版目録や近刊予告、新板広告を図書の巻末などに載せるようになった。

さらに文化文政年間(1804-1829)の初頭になると、すべての書籍にというわけではないものの、蔵版目録と並んで女性や子どもを含む家庭向けの薬や化粧品、雑貨の広告が混じるものが現れたのである。

それでは、なぜ広告はこのような変遷を辿ったのだろうか。

そもそも版元すなわち出版社は、文化の中心であった京都から発生した。元禄(1688-1704)後半頃から江戸でも私的な本屋の組合が発生し、1700年代半ばには江戸が中心になって発展してきた。

江戸における出版点数の変遷は以下のようなグラフになる。



文化7-11(1810-1814)年に至って、江戸の本は約460点、上方本は約140点となり、江戸の本が三倍以上になったことが認められる。

また、前述の「書籍目録」を比較することで、書籍のジャンルの多様化が確認できる。寛文6(1666)年刊行の『和漢書籍目録』と宝暦4(1754)年刊行の『新增書籍目録』を比較してみよう。

『和漢書籍目録』には約2,600点が掲載されている。分野としては、仏教書が43%、儒学書が9%、その他俳諧書や読み物類がわずかである。

一方、88年後に刊行された『新增書籍目録』には約2,700点が掲載されている。ここでは仏教書は16%と大幅に減少し、儒学書が6%となった一方、俳諧書が15%、読み物類が6%、また新しい分野としては書道11%、絵本6%などが増え、本の内容がバラエティに富んできたことが分かる。

以上のことは、武士や僧侶だけでなく、庶民の中にも本を読みたいという欲求が出てきていたことを示唆している。

では、庶民は本を読む能力をどこから得たのだろうか。江戸時代の大きな特徴の一つは、庶民の教育レベルの向上にある。幕府や藩による庶民の統治が文書を介したものになると、農民の中にも読み書きの能力を身に付ける必要が生まれた。また都市においても、商業が盛んになるにつれ、庶民にも帳簿や契約書である証文を書く能力が必要とされるようになった。

これらの需要にこたえたのが、寺子屋あるいは手習所である。寺子屋の普及は江戸初期においては商工業の発達した都市部が中心だったが、やがて農村部に広がり、最盛期には全国6万以上の村に少なくとも一つか二つの寺子屋があったとも推定されている。

寺子屋の普及の結果、地域差や男女差、また何をもって識字と見なすかという問題もあり正確な統計を取ることは難しいものの、自分の名前が書ける程度の識字層は幕末において60%前後に達していたともいわれている。

また、幕府による街道や宿場町、港といった交通網の整備により、書籍をはじめとする商品の流通は農村へも広がることになった。出版の中心地であった江戸や大坂から遠く離れた農村の寺子屋においても、文字を覚えるための『千字文』や生活の知識を覚えるための往来物といった書籍が広く流通し、教科書として使われていたのである。

さて、それでは庶民は書籍をどのような手段で読んでいたのだろうか。一つの手段として貸本屋が挙げられる。

貸本屋の始まりは寛永年間(1624-1644)と言わ

れているが、長屋を行商して歩くような貸本業が盛んになったのは1800年代の初頭、文化文政年間である。

出版が盛んになったとはいっても書籍は高価なものであり、文政8(1825)年刊の『今様職人尽歌合』を例にとると、奥付に「上下二冊定価銀五匁」とあり、現在の金額で約1万6千円となる。庶民がおいそれと買えるようなものではなかった。

しかし、貸本屋は仕入れた本を長屋の隅々まで届けて安く庶民に貸し、また彼らはそれを回し読みした。この仕組みにより、庶民であっても高価な書籍に触れることができたのである。

農村では、貸本屋の他にも庶民は村の有力者や寺が所蔵する本を借用し、写して読んでいた。また、都市部の商家では、先輩が後輩に読み聞かせるなどして、書籍に触れる機会を持ったといわれている。

以上のように、江戸時代においては書籍の刊行点数が増加し、ジャンルが多様化すると共に、読者層も大きく広がった。このことは、書籍が広告媒体としての潜在的価値を持ったことを意味する。そして貸本を通じて一冊の書籍を多くの読者が読むようになると、その価値は更に高まった。

そこに目をつけたのが戯作者たちである。現代に比べ圧倒的に版元の力が強かった江戸期には、出版における戯作者の取り分は非常にわずかであり、専業作家として生計を立てることのできる戯作者はごく限られていた。必然的に、多くの戯作者は著述とは別に生業を持たざるを得なかった。そこで彼らは、自分たちの作品の中で副業としていた薬や雑貨などの商品の宣伝を行い、収入増に利用していったものとみられる。

以上のような江戸期の書籍広告の変遷の背景を踏まえて、以下では戯作者たちの副業（著作以外の職業を副業と見なす）と薬の広告について、専修大学所蔵向井信夫文庫の実例調査について報告する。

向井信夫文庫から副業をもつ代表的な戯作者である山東京伝、滝沢馬琴、山東京山、式亭三馬の

4人を選び、薬や化粧品などの広告が掲載されているか調査した。また、戯作者たちの活動年代と掲載広告との関係から例えば無刊記本の刊年推定などの書誌作成に役立てることはできないかと考えた。

まず江戸の薬屋事情だが、製薬、売薬業は江戸時代に入って大きく発展した。江戸時代の便覧類を見ると江戸では貞享4(1687)年から文政期(1818-1829)にかけて薬種問屋が38軒から51軒に、生薬屋は124軒から206軒へと増加しているのがわかる。当時の便覧で確認できなかったが、大坂・京都でも同様に増加していたと推測される。

売薬とは調合、包装済みの薬のことで、売店あるいは行商によって販売されていた。当時の医者は診察代が高かったので庶民が医者にかかることは難しかったようである。医者にかかることができない庶民は、まずは売薬で病に對抗した。

売薬の数は現在、知られているだけでも1,500種類あり、その数からもいかに江戸っ子が売薬に親しんでいたかがうかがえる。家の中ではもちろん旅行にも携帯された。

十返舎一九『東海道中膝栗毛』には、弥次喜多の二人が売薬「反魂丹」と「錦袋円」を持参していた様子が書かれている。

尚、こうした売薬は決して安いものではなかった。例えば人参は特に高価で、宝暦頃(1751-1763)は並人参一両目(15g)がほぼ金1両(現在の価格で約8万円)、つまり米一石の値であった。

次に、向井信夫文庫に見える薬の広告について報告する。

調査の対象を「副業を持つ4人の作家の作品であり、かつ書籍以外の広告を持つもの」とし、書籍1点ずつ、薬や化粧品の広告を調査する作業を行った。

抽出書誌数は約600件で、そこに掲載された広告から約100種類の薬・化粧品名を採取した。現在確認されている江戸時代の売薬数が1,500種類としても、かなりの種類の薬が書籍に広告掲載されていることがわかった。またこれらの薬の中に

は、4人の戯作者たちが製造したものではない売薬も多数含まれており、書籍と薬や化粧品の販売について、広告・流通が互いに協力し合っていたことが推定される。

続いて、今回の調査でとりあげた、山東京伝、滝沢馬琴、山東京山、式亭三馬の4人の戯作者たちのプロフィールと副業、その広告の翻刻を紹介する。

①山東京伝

江戸時代中期～後期の戯作者、浮世絵師。代表作は、『忠臣水滸伝』『江戸生艶気樺焼』などがある。副業として、銀座一丁目の借家で煙草入れの店を出していた。商品の紙煙草入れに独特の工夫をし、自ら描いた引き札などを利用し、たくみな宣伝をした商法が当たり繁盛した。近くに出た医師の売家を買って移転し、その後本格的に商売を行った。

代表的な商品には、煙草入れ、読書丸、白牡丹おしろい、奇応丸、小児無病丸などが書物からうかがえる。一例として、山東京伝著『桜姫全傳曙草子』に掲載されていた朱子読書丸という薬の広告の翻刻を示す。

「気こんをつよくし物おぼえをよくす 心腎のきよそんによし きのかたぶらぶらわづらひによし うまれつきてよわき人用いてよし 常に辛労おをくする人老若男女にかぎらず身におぼえて志るしあり 道中するか又病身の人は常にたくわへおくべし きうつ酒の酔しゃくつかへ腹痛のたぐひは一粒にて奇特あり」とある。

薬の効能は、「根気を良くする」「頭のよくなる」薬のようだが、精神的ストレス解消の薬でもあったようだ。江戸時代中期になると、世の中は安定していたが、一方で人間関係のストレスもあったようだ。時代の流れを山東京伝はすばやく読み取っていたのかもしれない。

同じ頁には、「売弘所 江戸京橋 山東京伝 烟草入店」とあり、山東京伝が自分の煙草入れの店で薬を販売していたことがわかる。

②滝沢馬琴（曲亭馬琴）

江戸時代後期の戯作者。代表作は、『椿説弓張月』『近世説美少年録』『燕石雑志』『玄同放言』『南総里見八犬伝』などがある。

副業として売薬を行っていたが、それは息子宋伯が松前藩の医官をつとめた医者で、売薬の経営を行っていたが、病弱で大病し倒れてから、馬琴一家で売薬製造に携わっていく。売薬を始めたのは馬琴50歳半ばとされる。製造した売薬は、「神女湯」、「奇応丸」、「熊胆黒丸子」、「つぎ虫の妙薬」などである。

文政11(1828)年『己鳴鐘男道成寺』巻末に「家伝神女湯」の広告が掲載され、この年以降の出版物にはほとんど全てに売薬広告が載っている。馬琴の代表作『南総里見八犬伝』にも広告が掲載されている。代表的な薬として、「精製奇応丸」、「家傳神女湯」などがある。

③山東京山

江戸時代後期の戯作者。山東京伝の弟。代表作には、『大晦日曙草紙』『教草女房形気』など多数ある。副業としては、篆刻家として活動する。兄の山東京伝の店に自ら製造した「水晶粉」を置いていた。水晶粉は京山にとって生涯の主力商品である。山東京伝著『双蝶記』に掲載されている水晶粉の広告を翻刻すると「いかほどあれしやうなるともこれをつかへばきめをこまやかにし つやをだししぜんといろを白くする事妙なり ひびしもやけ はたけ あせものるいをなほす 京山製」とあり、水晶粉は、山東京山が製造していた、肌の状態をよくする薬もしくは化粧品ということがわかる。広告の下には販売店である兄の店「江戸京橋南 山東京伝店」の名前が掲載されている。

④式亭三馬

江戸時代後期の戯作者。書肆で働き、のち古本屋、薬屋を営む。代表作は、『侠太平記向鉢巻』『浮世風呂』『浮世床』などがある。副業は、35歳のときに江戸本町2丁目に京都の田中宗悦が製する「仙方延寿丹」の関東売弘所として売薬店を開店。翌文化8年(1811)に化粧水「江戸の水」を発売した。『浮世風呂』『浮世床』などの自著で商品宣

伝をしたこともあり「江戸の水」は大ヒットした。

『忠臣蔵偏痴気論』に掲載されている「江戸の水」の広告を翻刻してみると、「おしろいのよくなる薬 江戸の水 はこ入 代四十八文 第一きめこまかにして御顔のつやを出し 白粉のりあしき御かほにても よくのりてはげず 夏ハあせ冬ハ風に あたるとも はげざる事うけ合なり にきびはたけそばかすあせも 御かほのできもの一切によし

△諸国に取次所あまたあり」となる。

この最後の一文から、江戸の水が全国に広がっていたことがうかがえる。

続いて、薬と書物の販売網について報告する。江戸後期に作者や貸本屋を含めた本屋が、製薬、売薬また「取次」をしていたことは、すでに鈴木俊幸著『書籍流通史料論序説』や長友千代治著『江戸時代の図書流通』の著作などで触れられているが、実際に、「向井信夫文庫」の中でもその例を見ることができる。

滝沢馬琴『南総里見八犬伝』9 輯巻 53 の広告で、版元の丁子屋平兵衛は、林氏製の売薬、救命丸の弘所と記載されている。

『近世書林版元総覧』によると、「丁子(字)屋平兵衛 文溪堂 岡田氏 江戸小伝馬町三丁目家主文化五年貸本屋世話役。『八犬伝』板元。他に読本、人情本、滑稽本など。坂本氏仙女香、林氏の救命丸の取次弘所。」と説明されている。

この広告には、弘所が 20 か所記載されているが、これは大和氏製造の「玉匱保赤圓」という薬の弘所で、京都・信州・江戸・上州などの地域でも販売されていた。

「売弘所」「弘所」「取次所」などの記載があるが、これらの呼び方の違いについて詳しくはよくわからないが、問屋・取次・小売を意味するものようである。馬琴『南総里見八犬伝』4 輯巻 4 の右頁に、「編述 曲亭馬琴稿本」とあり、家伝神女湯、精製奇応丸などの馬琴が製造した薬広告が並び、製薬ならびに弘所として、「江戸元飯田橋滝沢氏」とあり、これは馬琴のことを指している。

取次所は、江戸芝神明前いつみや市兵衛、大坂心齋橋筋唐物町河内屋太助と記載されている。

左頁には、八犬伝を筆頭に馬琴などの書籍の広告が 7 種類掲載されている。版元として、ここにも河内屋太助の名前がみえる。

『近世書林版元総覧』によると河内屋太助は、「版元・河内屋太(多)助 文金堂 森本氏 大坂心齋橋筋唐物町南入。滑稽本多し。馬琴の著作多し。江戸和泉屋市兵衛と共に馬琴の家伝薬神女湯、精製奇応丸の取次所。」と記載されている。

つまり、版元すなわち書店が、書籍以外の薬などの取次を兼ねていたことがわかる。また、戯作者たちが著作と副業の双方の広告を、自分の書籍を使って、最大限に宣伝していたこともわかる。

このことは、戯作者の原稿料の少なさも一因として挙げられる。戯作者の中で原稿料を主収入とできたのは十返舎一九くらいで、ほとんどの場合、一席設けられたり、贈り物を貰ったりする程度であった。そのため、京伝は煙草入屋、馬琴は下駄屋や手習師匠、家守の収入を主なものとして生活していた。このことが、作品の中で副業の宣伝をすることに繋がったのではないか。

次に、この調査を行うにあたって、

① 書物に、薬などの広告がなぜつけられたのか
② これらの広告が書誌作成に寄与できる可能性はあるのか。という二点の考察を試みた。その実例調査を簡単にまとめる。

まず①について、戯作者たちが製造した薬や化粧品を宣伝するために、自分たちの著書に広告を掲載した理由は、生活を支えるために彼らの副業である薬や化粧品の製造から利潤を得るためではないか。

実例調査においても、版元つまり書店が書物だけでなく、薬の取次を兼ねている事例などを見つけることができた。又、個々の作家の副業の広告だけでなく、広く「取次」で扱われていた売薬や化粧品の広告も確認した。馬琴の薬などを広く売りさばく組織があったことも見受けられる。副業をより活発にするために売弘所などの販売ルート

も広めていた。

異業種である薬屋と本屋の流通網を相互に利用しているため、薬の広告と書籍の広告がほとんど同列に扱われているように見える。また、本と薬の取次所や弘所は江戸・大坂だけでなく全国各地に及んでいた。

教育と識字率の普及そして貸本屋の広がりなどで、読み本などの娯楽本の読者層も広がった。売薬の購買層が医者にかかれぬ庶民層を含むとすると、薬の購買層と娯楽本の読者層が重なり合うことになる。つまり、書籍に薬の広告を載せることは、流通網の相互利用だけでなく広告の効果が高かったと思われる。草双紙などに、「仙女香」の広告が掲載されている例もあるので、4名の戯作者以外、更には草双紙にまで範囲を広げれば、庶民層との繋がりが更に解明されよう。

次に②については、薬・化粧品の製造時期と流通していた時期の広告掲載時期はほぼ一致していると推定されるが、実際にはこれらを個々に実証することは困難である。今のところ刊年特定の手がかりとするには難しいといえる。

調査の過程において今回は4名の戯作者を対象に調査したが、その作者達の著作につけられた薬、化粧品などの広告が他の戯作者達の著作に記載されることは少なかったようだ。又、その4名の広告が他のジャンルの書物、例えば漢籍や仏書、往來物などの分野の刊行物に記載された例も見かけなかった。しかしながら今回取り上げなかったが、薬の広告については英文蔵の登龍丸の広告はよく知られている。この登龍丸は今回の4名の著作物には掲載されていなかった。この登龍丸はどこに記載されているか調べたが、一部はかなり高度な漢籍や寺子屋で使用する書物、あるいは英文蔵による後印本などに広告が見えた。また広告から英文蔵は多くの取次所を持っていたことがわかり、そのことから流通網が作られていたことが知られている。この英文蔵のことについては、いずれ分析してみたいと思う。

これらの薬・化粧品広告は、江戸期書物の特徴

の一つであるともいえる。

戯作者たちの副業と広告について、また翻刻などの背景知識を持つことは、江戸期に出版された書物の書誌作成に役立つともいえるだろう。

最後に、以上のことから書物につけられた広告もなおざりにせず、調査資料から丁寧に情報のメモを取ることも必要であると、今期2年間の活動を通じて強く感じた。

参考文献

1. 今田洋三『江戸の本屋さん』日本放送出版協会、1977
2. 鈴木敏夫『江戸の本屋上・下』中央公論社、1980
3. 長友千代治『近世貸本屋の研究』東京堂出版、1982
4. 西山松之助ほか編『江戸学事典』弘文堂、1984
5. 吉田孝ほか執筆『交通・運輸』日本評論社、1985
6. 速水融、宮本又朗編『経済社会の成立 17-18世紀』岩波書店、1988
7. 鈴木昶『江戸の妙薬』岩崎美術社、1991
8. 竹内誠編『近世都市江戸の構造』三省堂、1997
9. 井上隆明『近世書林板元總覧改訂増補』青裳堂書店、1998
10. 杉山茂『薬の社会史1』近代文芸社、1999
11. 長友千代治『江戸時代の書物と読書』東京堂出版、2001
12. 長友千代治『江戸時代の図書流通』思文閣出版、2002
13. 鈴木昶『日本の伝承薬』薬事日報社、2005
14. 市川寛明、石山秀和『図説江戸の学び』河出書房新社、2006
15. 高橋敏『江戸の教育力』筑摩書房、2007
16. 橋口侯之介『和本入門』『和本入門続』平凡社、2011
17. 中野三敏『和本のすすめ』岩波書店、2011
18. 吉岡信『江戸の生薬屋』青蛙房、2011
19. 鈴木俊幸『書籍流通史料論序説』勉誠出版、2012